
art spiral

メイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

a r t s p i r a l

【Nコード】

N 8 7 4 5 T

【作者名】

メイ

【あらすじ】

小さい頃からずっと絵を描いていた。私は絵が大好きで、だから上達も速くて。皆は私の絵を見て「凄い」って口を揃えるけれど。私は自分のこの絵が好きになれない。
こんな才能は何の意味も無いから。

無意味な才能

絵を描く事が好きだった。

幼少期の自分は、何も考えてない頭スツカラカンだった気がする。多分それは覚えてないだけで、少なからず何かは考えてたんだろう。けどやっぱりその時の事はうる覚えで、やっぱり頭スツカラカンだった気がしてならない。

さて、当時6歳でまだ可愛かった筈の私は、何故だか通っていた幼稚園での友達は居なかった。多少根暗気味な傾向があったのかも知らない。友人皆無な私は常に一人で絵を描いていた。幼児の割に上手かつたらしいその絵は周囲の注目を大いに集めた。それに嫉妬したらしい集団の女子がよく私を陰であーだこーだ言ってたけど、どうやら私は幼いながらに度胸は十分あったらしい。別に気にせずただ絵を描いていた。「仕事が恋人！」っていう様に「絵が友達！」って感じだったんだろう。だから不思議と寂しくなかった。両親はこの頃から多忙で家には夜しか居なかったけど、遊び相手は祖母がなってくれたからよかった。それだけでよかった。毎日は退屈じゃなかった。

あれから7年が経って、私は中学1年生の13歳になった。

7年で私は別人と化した。今はあの頃とは違う。可愛げのない、冷めた女の子になった。7年の間に家庭とかの問題が色々あったからだと思う。それで人格変貌でもしたんだろうか。何もかもがあの頃と違った。性格も、考え方も、癖も、好みも、話し方も。

だけど変わってはいなかった。1つだけ。

別人になった私が唯一変わらずに生きていたその部分は、” 絵が好き” って事だった。

授業中も無意識にノートの端で手が動いた。依存症みたいに絵を描いていた。描いてないと生きてけなかった。それ位絵が好きで、楽しくて、大好きだった。描いてれば何もかも忘れた。理由無しに絵が大好きだった。

” 好きこそ物の上手なれ” ってのはうまいこと例えたもんだと思う。正にその通りだった。好きだったからこそ。私の絵の腕は物凄い早さで上達していった。誰もが皆私の絵を見て” 凄い” と言った。褒められる為に描いてた訳じゃないけど、それは素直に嬉しかった。

だけど最近になって気付いた。

私の絵には、何も無いって。

上手いだけ。私の絵は頭に浮かべたものを上手く表現して描くだけで。感動も、圧倒も。そういうのは何もない。見ただけで何かが頭に入って来るようなものが。それが無い。私の絵には。

無意味なんだ、私の絵は。

この私の才能は。

呼吸するように絵を描いて

絵を描く事に意味なんて無かった。

私、菱倉鈴可^{ひしかわすか}が中学校に入学してすぐにあつた、工場見学新聞まとめ。その新聞をまとめた冊子の表紙の絵を描いてくれないかというオファーが5月某日に飛び込んできた。断る理由も無いので私はそれを引き受け、期間内に絵を描いてその冊子の担当の皆川先生に提出した。その後日にコメントを書けと言われて、私はかなり正直に

”特に思い入れは無いです。絵が好きなのでただ単に楽しんで作成しました”

・・・案の定、皆川先生に怒られた。

「そういうことは言わなくていいの！ えーと鈴可ちゃん、難しかった所は何処？」

「は？ いや・・・ぶっちゃけ特に無いで「無い訳は無いでしょう！？」 何処が難しかった！？」・・・スクリーントーンの貼り付けっス」

皆川先生の全力のボキャブラリーとフォローにより、私のコメントは実に模範的でかつ型に嵌ったものへと変貌を遂げ、堂々公表された。・・・多分大人の社会の裏っかわもこんな陰謀が溢れてるに違いない。沈黙は金って事でこの件はオフレコにしなきゃなんないのが暗黙のルールなんだけど、コメントを変えられて面白くなかった私は友達に全部喋った。わはは。こんな黒歴史はきつと漣市立北守中学校初に違いない。

だって実際、私は絵に気持ちを込めて描く事はない。いやそれって絵を描く人間としてどうなの？　ってなるかも知れないけど。私は描きたい時に描きたいものを描きたいだけ描くだけで、気持ちも思い入れも何も無いんだって——　そうは言ってもやっぱりいけないものはいけないんだそうで、私のコメントが訂正される事は無かった。

「あつ、鈴可ちゃん！」

昼休みに、私の4組の教室に顔を出した友人がいた。板野佳代。小学校時代からの友達。

「佳代ちゃん？　どしたの、私は君に何かしたかい」

「何もされてないよ！　ありがとね、表紙描いてくれて」

「・・・ああ」

私に表紙の絵を描いてくれと頼んだのはこの佳代ちゃんだった。

彼女はいつもの可愛らしい笑顔で続ける。

「ほんと凄かったよ！　やっぱり鈴可ちゃんは絵上手いよね。皆川先生も褒めてたよ？」

自分の顔から表情が消えるのが分かった。

そんな事も分からない無邪気な彼女は言葉を続ける。

「ほんとありがとね！　また何かあったら絵御願い！　鈴可ちゃん本当上手いから、ねっ」

私は作り笑いを彼女に向ける。

「・・・ああ、そう。気が向いたらね」

人間は呼吸をして生きていくもの。

それと同じ様に、私は絵を描いて生きていた。

呼吸するように、当たり前前に絵を描いて。

思い入れも気持ちも何も無しに絵を描いて。

だから私の絵には、何も無いんだろうか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8745t/>

art spiral

2011年11月13日14時35分発行